

大原の里と比良の山

大原のオオムラサキを守る会
蓬 萊 む し の 会
第 21 号 2025.12.10

安曇川水系流域のシコブチさん その2

的場 亮一

2014年3月16日のフォーラムは、シコブチさんに関連する情報をまとめて体系だって知ることができた素晴らしい機会だった。まずはそこで知ったことを中心に、その後、本やネットで知った情報も加え、できるだけ整理してみた。

① 安曇川について

安曇川はびわ湖にそそぐ約115本の一級河川中、流量が毎秒17tほどで、ダントツの1位。2位は姉川だが、毎秒10t程度。琵琶湖の水はたった1本の瀬田川から流れ出て大阪湾に流れ込んでいるが、逆にたどると、淀川—宇治川—瀬田川—びわ湖—安曇川—葛川—針畑川、さらにたどると、小入谷と地蔵峠の源流に行きつく。そしてもうひとつ京都市左京区の大見川と百井川が葛川に合流している。つまり滋賀県の西北部と京都市左京区の北部に降った雨がまとめられ、安曇川としてびわ湖に流れ込んでいる。

② 筏流しの歴史と安曇川

安曇川流域でみつかった石器などから、縄文時代から人々が流域に住みついていたと推測されている。

縄文時代の遺跡に丸木舟は出土しているが、筏は出土していない。一方弥生時代後期の滋賀県守山の伊勢遺跡や奈良時代の平城京跡から出土した柱根に、闊掬穴（えつりあな）とよばれる筏を連結するためにマンサクの木をあぶって作った弦を通す穴が見ついている。そのことから当時すでに木材の運搬に筏が使われていたと考えられている。万葉集（巻1-50）の長歌にも、「・・・滋賀の田上から檜の丸太を（瀬田川から）宇治川に流し・・・」や「・・・五十（い）かだに組んで・・・」といった記述がある。一方日本書紀にはヒノキを宮殿や神殿など神聖な建築の柱材に使ったとの記述がある。つまり筏が当時から木材の運搬手段として使われていて、安曇川流域のヒノキやスギは平城京や平安京の造営材に利用されていたと考えられている。

『正倉院文書』（天平宝字6年 762年）には、東大寺造営の役所の記述にともない、甲賀・田上・高嶋の山作所（製材所）の記載、針畑川沿いで伐りだした材木が、針畑の小川（こがわ）で筏に組まれ、びわ湖を通り、瀬田川、宇治川を下り、巨椋池から木津川を遡上し、泉津（木津）からは陸送で奈良に運んだことが記載されている。中世には延暦寺や比叡山の伽藍建築用材として安曇川流域の木材が使われたことが記録に残っている。

ところで記録によると、1662年6月16日（寛文2年5月1日）に寛文近江・若狭地震という巨大地震が発生し、近畿北部一帯が甚大な被害に見舞われた。地震による家屋の倒壊だけでなく、大規模な山崩れで川がせき止められ大きな自然のダムができ、流域の村落が水没し、さらにそのダムが崩壊し下流の村落が洪水被害に見舞われたそう。おそらく大見や尾越も甚大な

被害があったことは想像に難くない。林業や筏流しにもかなりの影響があったことと推測されるが、詳しい記録はみつけれられていない。

江戸時代は筏流しが最盛期を迎え、安曇川で組まれた筏が琵琶湖に流れ、湖上を南下し、坂本、大津、膳所などでも陸揚げされ、そこから京都・大阪方面に送られていった。しかし安曇川の筏流しは昭和 10 年代後半から衰退していった。水力発電用ダムの建設、道路整備にともなうトラック輸送や鉄道敷設による貨物輸送が発達し、そのうえ日中戦争、太平洋戦争などで若者が軍に応召され、筏の乗り手がいなくなったため、1948 年（昭和 23 年）に安曇川水系の筏は廃絶した。さらに外国産木材の輸入増大とともに、地域の林業は基幹産業の座を追われてしまった。

現在は限界集落として人口過疎が問題になっている針畑川沿いも、当時は材木の積み出しでとてもにぎわっていたようだ。おそらく大見も同様だったことだろう。表 3 は大見と尾越の近年の国勢調査結果。詳細は分からないが、平成時代と令和では世代が変わっているかもしれない。

③ 筏あれこれ

【筏の構造と搬出】 約 50 本のスギ材・ヒノキ材を筏に組み、1 本の長さは 1 丈 2 尺 (3.6m) が基準。筏一つを 1 連と呼び、6～8 本からなり、マンサクの木を練って筏の結束や連結の綱とした。昭和になってからは 1 本 14 尺 (4.24m)、上流で 5 連ほど、中流からは 8～13 連で全体で約 50m ほどにもなった。先頭の筏をハナ（ハナズ）と呼び、細い丸太で組まれた。2 番目の筏をワイズ（ワキ）、3 番目から最後の手前までの筏をノリス、最後尾の筏をドデン（ズデン）と呼び、特に最後は太い丸太で組まれた。

安曇川の筏師が使用する竿はコブシの木で作り、竹やヒノキは使わなかった。これは安曇川筏の特徴で、急流が多いため弾力性に富んだコブシが使われた。カジボウ（舵棒）にはネジキが使われた。材木は、「土用伐り」と呼び、梅雨が明けた土用のころに斧とのこぎりで伐り、14 尺の長さに切られ秋まで乾燥後、そりにのせ、冬に雪を利用して川まで運んだ。谷川をせき止めて鉄砲水を作り、一気に本流まで搬出することも行われた。伐採はスギでは 50～60 年生、ヒノキでは 80 年生くらいのものが標準とされた。

【筏師】 筏には通常 3 人が乗り込み、ハナズ（ハナ）と呼ぶ先頭の連に乗るハナ乗り（針畑ではハナ取り）、2 番目の連ワキ（ワイズ）、3 番目の連（ノリス）に乗る人は、連（ノリス）と同じ呼ばれ方をしていた。たまにドデン（ズデン）と呼ばれる最後尾の連に乗る人は、ズデン呼ばれていた。ハナズの筏師が竿で岩などに当たらないように筏を操り、ワキとノリスの筏師が梶棒で操作した。通常はハナ乗りをベテランが担当し進路を決定していたが、葛川は難所が多く、梶棒のネジキを操作するワイズ乗りが最重要視され、難所を知り尽くした経験豊富なベテランが担当し進路を決定した。

表 3 大見・尾越の国勢調査結果

西暦・和暦	地域	総人口	男	女	世帯数
1995 H7	大見町	6	x	x	x
	尾越	-	-	-	-
2000 H12	大見町	3	1	2	3
	尾越	6	4	2	4
2005 H17	大見町	1	1	-	-
	尾越	5	3	2	3
2010 H22	大見町	-	-	-	-
	尾越	4	2	2	2
2020 R2	大見町	2	2	0	2
	尾越	4	2	2	2

（-はゼロ、Xは秘匿回答のため不明）

筏師は代々親から子へと引き継がれ、息子は 15～16 歳ころから父親の筏に乗って仕込まれたという。筏師は粋ないでたちで、縞の藍染のハンコ（半纏）、布のカリサン（股引。カリサンはポルトガル語のカルサオンで短ズボンの意）、紺の帯、手ぬぐいで頬被り、上から蓑、足には足袋と草履ばき、手にはコブシの竿を持っていた。もっとも暑い時は上半身はほぼ裸で、褌と股引だけだった。14 歳から筏に乗り父親から技術を習得した筏師 I さんによると、筏師の仕事は危険が伴うため、他の職業にくらべ、3～4 倍の高賃金だった（表 4）。ちなみに昭和 10 年（1935 年）代の東京の小学校教員の初任給は 50～60 円、昭和 17 年（1942 年）の白米 10kg の小売価格は 3 円 32 銭 1 厘、同 24 年（1949 年）の白米 10kg の小売価格は 393 円だったことから、高賃金だったことが分かる。筏師は、いなせで格好よく、羽振りもよく、若い娘・女性たちのあこがれで、とてももてた。安曇川流域には難所が多いため舵棒のネジモ（ネジキ）を操作する 2 連目のワイズ乗りが、最重要視されていた。他の川では通常先頭のハナ乗りが最ベテランが担当する。木曽川の場合、先頭を「舳乗り」（へのり）、後ろを「艫乗り」（とものり）、真ん中を「中乗り」といった。木曽節の「木曽のナー なかのりさん」は、筏で真ん中に乗る「中乗り」のことである。

表 4 筏師の日当

筏師の日当	
1941 年	見習い時 80 銭
1943 年	見習い終了時 1 円
1948 年	500 円

④ シコブチ神とカップ、川太郎

安曇川流域だけにしか祀られていないシコブチ神とは何か。曲がりくねった急流や深い淵などにかかわる自然神とみなせる。いろんな説があるが、澤潔氏の説によると、シコブチさんのルーツは次のようだ。

その昔大陸から朝鮮半島経由で渡ってきた九州北部の漂泊海人（あま）、宗像系海人と安曇系海人の中で、後者の海人が日本海から小浜・敦賀地方にやってきて、山越えで、びわ湖の北にはいり、安曇川をさかのぼり陸地に住み着いたというもの。詳しいことは省くが、安曇系海人はまた製鉄の技術を持ち合わせていた。いわゆるたたら製鉄で、砂鉄を集めふいごを用いて木材を燃やし、低温での製鉄で、不純物が混じりにくく、良質の鉄ができたという。安曇川の左岸の熊野本遺跡には、大規模なたたら、製鉄コンビナートが推測される板状鉄素材などが出土している。人里離れた山中でその製鉄に従事する渡来人たちは、当時の住民から漂泊の流れ者と差別の目でみられるなか、製鉄や慣れぬ林業をやり、筏流しもやっていたのだろう。そのうち彼らの鉄製品の価値が理解され、彼らの地位もあがり、並行して滋賀県の各地にたたら製鉄コンビナートができていった。比良山麓製鉄遺跡群、マキノ製鉄遺跡群、瀬田丘陵製鉄遺跡群、他がある。

シコブチさんはたたら製鉄の初期のころの海人で、山中に住み筏も流す強い妖怪のようなイメージで見られていた。ちなみに「シコ」には「強い」の意味もある。シコブチさんは安曇川急流に棲み人間に悪さをする川太郎（ガワタロウ：カップ）を懲らしめ、悪さをしないように諭したことから、急流の淵の神様として祀られた。岩瀬では、昔岩神社と思子淵神を祀る社殿があったが、寛文 2 年 5 月朔（1662 年 6 月 16 日 太陽暦）の寛文近江・若狭地震と洪水で社殿は流出したものの、幸いご神体を守ることができたため、思子淵神社を再建した。岩瀬では「しこぶつつあんの氏子は、子供が水浴びをしても、がわたろ（川太郎：カップ）が連れていかん」と言われてきた。

以下は『朽木の昔話と伝説』朽木村教育委員会 P92 より引用した、岩瀬に伝わる伝説。同様の、伝説は安曇川町中野でも伝え語られている（『読みがたり滋賀のむかし話』）。

むかし、思子淵神（しこぶちがみ）が、遅越（おそごえ）の続ヶ原で、筏の端に息子を乗せながら流していた。

にわかに、筏の流れが、途中で止ったので可笑しなことやと思うと、そこは、深い淵やった。気がつくやうと、筏の端に、いたはずの息子の姿が見当たらん。そこでもっていた筏棹で、水の中を探してみると、水の底に一匹のかっぱが、息子を抱きかかえるようにして潜んでいた。そこで思子淵神は、河童を戒め、息子を救い出し、筏を流して行つた。

その時、かっぱは捕えられたが、今後は、菅（すげ）の、みの笠をつけ、蒲のはばきを履き、辛夷（こぶし）の竿を持った者には、一切害を加えないことを誓つたので放してやつた。

安曇川筋には、七思子淵というて、七か所に、思子淵神社がある。また。思子淵講で祀るところもある。筏乗りの守り神である。（岩瀬）

シコブチさんという人は、海人の子孫で人里離れた山中で製鉄に従事し、その後も木材を切り出し、筏を操り危険な安曇川の瀬をくだり、林業でも生計を立てていたのだろう。さらに筏師の一人として、たくましく筏を操り林業の筏師たちにあがめられ、のちに神として神社に祀られたと考えられる。

思子淵神社は、伐り出した材木を集積し、筏を組んだりする作業場（ドバとよぶ）や、筏の乗り換え地点、河川が大きく曲がりあるいは合流し筏流しで危険な難所に立地している。

ひとつの水系で、こんなにたくさんの同じ神社が建ち、同じ信仰が何百年も守られてきたことは、日本国内はもとより、世界的にもとても稀有なケースだそう。一つだけ似たケースが、ドイツにある。「なじかは知らねど 心わびて」で始まるあの歌の、ローレライ伝説だ。ライン川中流で最も狭いところの難所でよく船の事故が起きたところで、伝説にはいろんなバリエーションがあるが、「ローレライとは不実な恋人に絶望してライン川に身を投げた乙女であり、水の精となった彼女の声は漁師を誘惑し、破滅へと導くというもの」が最大公約数的な伝説だ。しかし現在はそのライン川に突き出た岩山（ローレライ：見張りをする岩の意）の上に、身投げした乙女像があり、そばにローレライ・センターという観光施設があるだけで、シコブチ信仰とは大きな違いがある。

⑤ 安曇川と「安曇」

安曇系海人は北九州から出発し、山陰沿岸～若狭～琵琶湖～信濃～日本海沿岸～東国へと進出していったと考えられる。その足跡が「安曇川（滋賀）」、「安曇野（長野）」、「温海（山形）」、「渥美（愛知）」などの地名に残っている。

つまり、これらの地名は 安曇氏の移動と定着の痕跡 と解釈されている。「あずみ」のほかに金印が発見された志賀島も含め同様に「しが」という地名も各地にあるが、ここでは触れないでおく。

以上、フォーラムや参考文献から得た情報を整理してみたが、果たしてうまく整理できてい

るかははなはだ疑問である。一方これまで分かったことの一つに「しこぶち」を表記する漢字がいろいろとあり、さらにはある一つの場所の神社に対しても、さまざまな文献で様々な表記が見られた。それら違いは文献の筆者による間違いなのか、そもそも昔から文字ではなく発音で伝わってきたものが、ある時から文字で記録されるようになり、そこでいろんなバリエーションが生じたような気もする。したがって各地の神社の標記についてはあまり気にしなくてもいいのかもしれない。

次回、安曇川水系流域のシコブチさん その3 に続く。

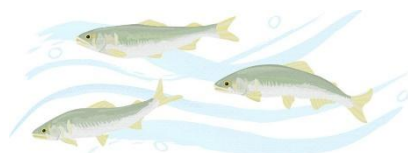
参考文献

- 京遊びわ湖山河物語 澤 潔 文理閣
 朽木の昔話と伝説 朽木村教育委員会
 読みがたり滋賀のむかし話 滋賀県小学校教育研究会国語部編 日本標準
 安曇川と筏流し 石田 敏 京都新聞出版センター
 安曇川 RIVER MAP 安曇川流域文化遺産活用推進協議会
 安曇川流域のシコブチ信仰 フォーラム講演資料 嶋田尚子
 安曇川流域の筏流しと林業遺構 フォーラム講演資料 石田 敏
- 万葉百科 奈良県立万葉文化館 歌詳細
 (https://manyo-hyakka.pref.nara.jp/db/detailLink?cls=db_manyo&pkey=50)
 難波宮の造営と材木の供給 大阪歴史博物館 研究紀要 第14号 (2016) 栄原 永遠男
 (https://www.jstage.jst.go.jp/article/omhbull/14/0/14_1/_pdf?utm_source=chatgpt.com)
 安曇氏族の興亡 安曇誕生の系譜を探る会 金井 恂
 (<https://azumino-rekishisalon.net/%e4%bc%9a%e5%93%a1%e3%81%ae%e8%ab%96%e8%80%83/>)
 過去の災害に学ぶ (第6回) 寛文2年(1662) 近江・若狭地震
 (https://www.bousai.go.jp/kyoiku/kyokun/kyoukunnokeishou/pdf/kouhou032_14-15.pdf)

麦酒

上田寿一

何年か前、ベランダで麦酒を
 飲んでいた時、冬枯の木が
 目に止った。空に広がる枝は、
 まるで体を走る血管の様だった。
 土と空を結びつけている。
 だとすると、前を流れる
 小川も村を環る血管で、
 小魚達は小川を泳ぐ
 赤血球や白血球。大切な物を
 運び浄化してくれている。
 麦酒の様に！



大原のアサギマダラ標識調査報告（2025 年度南下移動期）

大原のオオムラサキを守る会

1. はじめに

大原の豊かな自然を知ってもらうために、オオムラサキ飼育網室周辺に昆虫が吸蜜できる草木を植え始めたのは 2008 年である。その中にフジバカマもあった。以来今日に至るまでフジバカマの栽培は続き、開花期の 10 月を中心に‘旅をするチョウ’アサギマダラが飛来した。それに対する会としての標識調査がはじまったのは 2016 年である。ここに 2025 年の調査結果を報告するとともにこの 10 年間を振り返り、2025 年の飛来傾向を考察した。

2. 調査場所と調査方法

調査場所、すなわちフジバカマの植栽地は、当初は大原勝林院町の飼育網室周辺だけであったが、2016 年から大原戸寺町に大原由来の原種フジバカマを植栽し、2024 年には大原野村町の大原文化センター傍に、戸寺町から大原由来の原種フジバカマを移植した。勝林院町のフジバカマはコバノフジバカマと京都市西京区大原野産の原種フジバカマである。

アサギマダラはフジバカマの開花に合わせて飛来する。飛来開始から飛来終了まで、できるだけ会員の誰かが調査するように心がけた。調査にあたっては、飛来したアサギマダラを捕獲し、細字油性マーカーで翅の裏面に“いつ・だれが・どこで”の 3 つの要素を簡潔に書いて標識とし（図 3 参照）、写真撮影ののち放した。同時に、記録簿にこの 3 つの要素に加えて、捕獲個体の特徴や気象状況などを書き留めた。

捕獲時すでに標識があり、他所で標識されたと認められる個体には、大原での標識を書き加えたのち、写真撮影をして放した。この再捕獲の情報はメーリングリスト asagi によって発信し、最初の標識者が発信する移動情報（移動距離、移動方向、再捕獲までの期間、などからなる）を得た。

大原で標識した個体が他所で再捕獲されたという情報を得たときはその再捕獲情報に基づいて、asagi に移動情報を発信した。

3. 結果と考察

(1) 2025 年の標識調査結果

2025 年の標識調査結果の詳細を表 1 に示し、過去 10 年間の結果の概要を表 2 に示した。

① 調査期間

初標識は 10 月 1 日、最終標識は 10 月 25 日であった。初標識日が 10 月 1 日というのは、2016 年の 10 月 7 日に次いで遅かった。しかし 2016 年は初めてまとまった数が飛来した年で、それに気付いてから調査を開始したので初標識が遅くなったという経緯があり、そのことを考えると 2025 年が最も初飛来の記録が遅くなった年かもしれない。最終標識日の 10 月 25 日は過去 10 年間の平均値 10 月 26 日より 1 日早く標識を終えている（それ以降の飛来はなかった）。この結果及び過去 10 年間の記録の推移から考えると、アサギマダラの大原への飛来は遅くなり、飛来が終わるのは早くなる傾向が見て取れた。初標識から最終標識までの期間は 25 日、そのうち調査が行われたのが 15 日間であった。

表 1 2025 年 南下移動期の京都市左京区大原での標識記録

期日	標識 数	オスの 数	メスの 数	鮮 度	1日標 識数	飛来再 捕獲数	飛来再捕獲 の標識	被再 捕獲数	移動再捕獲の標識・場所・再捕獲者	標識者	時間帯	戸寺 標識数	勝林院 標識数	野村町 標識数
10月1日	2	2	0	2	0	2	0	0		的場亮一	11:50~12:30	0	2	0
10月8日	3	3	0	2	1	0	3	0		藤野適宏	9:25~12:15	1	2	0
10月10日	18	17	1	7	10	1	18	0		藤野適宏	11:50~15:10	0	18	0
10月11日	6	6	0	2	4	0	15	0		的場亮一	10:25~12:35	1	5	0
	9	8	1	2	5	2	0	1	KK-110H10/11・鹿児島県喜界町・福島誠	小松清弘	9:30~11:40	0	9	0
10月12日	3	3	0	0	3	0	3	0		村上 豊	15:20~16:20	0	3	0
10月13日	8	8	0	4	3	1	12	0		的場亮一	9:15~11:20	0	8	0
	4	4	0	3	1	0	0	0		藤野適宏	9:35~11:30	0	4	0
10月14日	0	0	0	0	0	0	1	0	YWA207M10.3		9:44	0	0	0
	13	12	1	8	3	2	0	1	RM290H10.15・神戸市摩耶山町・竹村真貴	的場亮一	9:30~14:30	0	13	0
10月15日	12	11	1	4	8	0	39	2	JYM290OH10.15・滋賀県高島市・柏井三郎 JYM290OH10.15・高知県室戸市・土居敬典	村上 豊	9:35~14:20	0	12	0
	7	6	1	3	4	0	0	0		藤野適宏	9:45~15:35	1	6	0
	2	1	1	1	1	0	0	0		大友正生	14:10~14:30	0	2	0
	5	5	0	0	4	1	0	0		奥谷 功	10:05~10:30	0	5	0
10月16日	10	8	2	4	4	2	10	0		小松清弘	13:15~14:05	0	12	0
	0	0	0	0	0	0	0	1	YWA74M10.1		9:02	0	0	0
10月17日	3	3	0	0	3	0	6	0		小松清弘	8:55~12:30	0	3	0
	1	1	0	0	1	0	0	0		的場亮一	8:55~11:50	0	1	0
	2	2	0	2	0	0	0	0		大友正生	11:10~11:50	0	2	0
10月19日	12	12	0	7	3	2	12	0		小松清弘	14:20~14:40	0	12	0
10月20日	7	4	3	3	2	2	7	0		奥谷 功	13:10~14:30	0	7	0
10月23日	14	10	4	8	6	0	15	0		的場亮一	13:40~15:00	0	14	0
	1	1	0	1	0	0	0	0		大友正生	14:45	0	1	0
10月24日	9	9	0	4	3	2	9	2	YWA320M10.8 TKM102MY10.9	小松清弘	10:00~14:15	0	9	0
10月25日	2	2	0	1	1	0	2	0		小松清弘	10:05~11:40	0	2	0
合計	153	138	15	68	70	15	153	4		23		3	152	0
最大/日	18	17	4				39					1	18	0

大原標識は他に、10月23日の大原学院生による11頭があるが、計上していない。

10月14日の再捕獲は来訪者の三橋氏による写真撮影、10月16日の再捕獲は来訪者の加埜氏による写真撮影

表 2 京都市左京区大原 10 年間の記録

年	初 標 識		最終標識		標識 日数	標 識 数			1日最大標識		1日平均 標識数	標識者 数	延標識 者数	再捕獲 数		再捕獲 %	
	日	数	日	数		合計	♂	♀	日	数				飛来	被	飛来	被
2016	10月7日	21	10月20日	10	9	544	500	44	10月12日	208	60.4	7	13	9	14	1.7	2.6
2017	9月24日	1	10月20日	2	7	148	137	11	10月12日	68	21.1	8	14	5	0	3.4	0.0
2018	9月24日	1	11月8日	1	17	405	378	27	10月14日	94	23.8	7	27	9	7	2.2	1.7
2019	9月19日	2	10月30日	1	13	62	58	4	10月9日	17	4.8	3	15	2	5	3.2	8.1
2020	9月30日	18	10月26日	1	16	243	232	11	10月11日	45	15.2	5	25	2	5	0.8	2.1
2021	9月22日	9	10月20日	1	20	831	798	33	10月13日 10月15日	137	41.6	5	31	16	19	1.9	2.3
2022	9月26日	2	10月24日	3	20	167	153	14	9月29日	29	8.4	5	29	0	8	0.0	4.8
2023	9月28日	5	10月27日	1	24	317	290	27	10月7日	40	13.2	8	39	6	10	1.9	3.2
2024	9月28日	1	10月30日	2	13	83	78	5	10月25日	25	6.4	4	17	1	2	1.2	2.4
2025	10月1日	2	10月25日	2	15	153	138	15	10月15日	39	10.2	7	24	4	4	2.6	2.6
合計						2953	2762	191		702	205.1	59	234	54	74		
平均	9月26日	6.2	10月26日	2.4	15.4	295.3	276.2	19.1		70.2	20.5	5.9	23.4	5.4	7.4	1.8	2.5

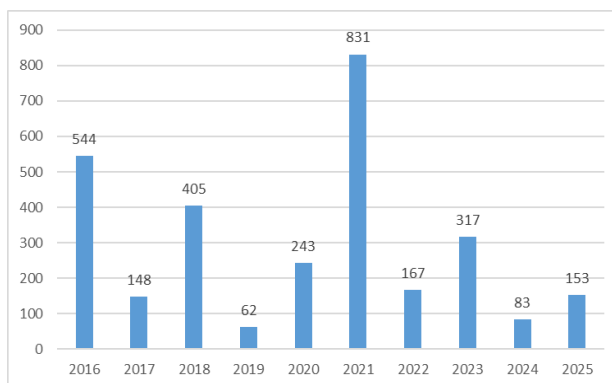


図 1 過去 10 年間の標識数の推移

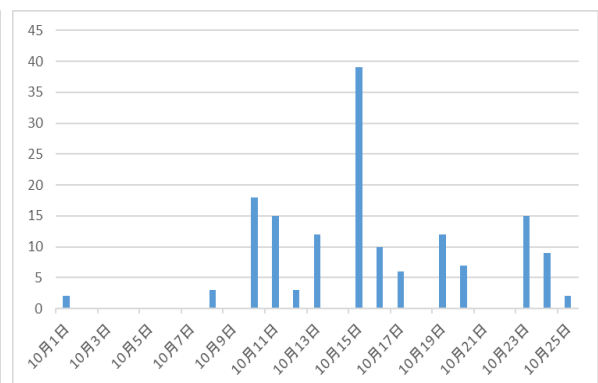


図 2 2025 年 日ごとの標識数の推移

② 標識数

調査を行った 15 日間で延 24 名が調査を行い、総標識数は 153 であった。過去 10 年間の標識数の推移を図 1 に示した。2025 年は前年度の 83 からはかなり増加したが、10 年間では 4 番目に少なく、10 年間の平均値の 295.3 に比べるとかなり少ない。全体としては飛来数は減少傾向にあるように思えるが、これからの推移を注視していきたい。

③ 日ごとの標識数の推移

日ごとの標識数の推移を図 2 に示した。初標識は 10 月 1 日であったが、次の標識は 10 月 8 日で、その間 7 日間は飛来を観察することができなかった。気象条件も関係していると思うが、10 月 8 日から本格的な飛来が始まったといえるかもしれない。

10 月 15 日の標識数が 39 と最大値であり、突出して多かった。この日あたりが 2025 年の飛来のピークなのかもしれない。他の日は総じて低調であった。

④ 植栽地別の標識数

3 地点のうち、戸寺町 3、勝林院町 152、野村町 0 で、勝林院町が圧倒的に多かった。フジバカマの植栽面積の違いを考慮しても、この差は顕著である。この結果の最大の原因は植栽地の環境の違いによると考えられる。勝林院は周囲に飼育網室と数本のエノキがある。他方、戸寺町と野村町は開けた環境で日当たりがよい。アサギマダラは明るい環境を嫌うのでこのような結果となったと考えられるが、植栽地を自由に選ぶことができないので残念な結果であった。

⑤ 雌雄比

フジバカマはオスを誘引する物質（ピロリジジナルカロイド：PA）を分泌するので、標識数はオスが多い。一方で多くの花同様に蜜も分泌するので、少なくともはあるがメスも飛来する。標識数 153 のうち 138 (90.2%) がオスであった。

標識が行われた 15 日間を 3 期に分け、10 月 1 日から 10 月 12 日を前期、10 月 13 日から 10 月 17 日を中期、10 月 19 日から 10 月 25 日を後期として、メスの飛来の割合を示したのが表 3 である。4.9%、9.0%、15.6%とメスの飛来の割合が増加していることがわかる。一般にメスはオスよりも遅れて移動すると言われているので、2025 年の調査の結果も同様の傾向を示していることがわかった。

表 3 飛来時期を 3 期に分けたときのメスの比率の変化

	標識数	メスの数	比率(%)
前期	41	2	4.9
中期	67	6	9.0
後期	45	7	15.6

(2) 移動の記録

アサギマダラは春季に北上移動、秋季に南下移動することが知られている。2025 年の秋季に大原のフジバカマに飛来するアサギマダラは、どこからやってきてどこへ移動していったのかを、各地の標識調査者とのメーリングリストによる情報交換により知ることができた。

① 飛来再捕獲

アサギマダラを標識するために捕獲したとき、すでに標識のある個体を捕獲することがある（飛来再捕獲）。メーリングリストによる情報交換で分かった結果を示したのが表 4 である。

飛来再捕獲は 4 件あり、すべて兵庫県からの飛来で、北東方向への移動であった。すべてがひとつの県からの移動というのも珍しいが、秋季の移動の大きな流れは南西方向であるにもかかわらず、全く逆の方向の移動となった。アサギマダラはその形態上、強い風に流される傾向にあるが、4 例とも逆方向の移動というのは特異であろう。

表 4 飛来再捕獲の記録

No.	標識者	標識	性別	標識日	標識場所	再捕獲者	再捕獲場所	再捕獲日	移動 日数	移動距離 (km)	移動方位 (16方位)
1	渡辺康之	YWA207M10.3	♂	10月3日	兵庫県宝塚市弥生町	三橋一史	大原勝林院町	10月14日	11	56	北東
2	渡辺康之	YWA74M10.1	♂	10月1日	兵庫県宝塚市小浜1	加笠百合子	大原勝林院町	10月16日	15	56	北東
3	徳増実事	TKM102MY10.9	♂	10月9日	兵庫県神戸市灘区摩耶山町	小松清弘	大原勝林院町	10月24日	15	71	北東
4	渡辺康之	YWA320M10.8	♂	10月8日	兵庫県宝塚市南口2	小松清弘	大原勝林院町	10月24日	16	56	北東

表 5 被再捕獲の記録

No.	標識者	標識	性別	標識日	標識場所	再捕獲者	再捕獲場所	再捕獲日	移動日数	移動距離 (km)	移動方位 (16方位)
1	的場亮一	RM 29 OH 10.15	♂	10月15日	大原勝林院町	竹村真貴	兵庫県神戸市灘区摩耶山	10月18日	3	71	南西
2	小松清弘	KK-11OH10/11	♂	10月11日	大原勝林院町	福島 誠	鹿児島県喜界町滝川林道	11月6日	26	937	南西
3	村上 豊	JYM290OH10.15	♂	10月15日	大原勝林院町	柏井 三郎	滋賀県高島市今津箱館山	10月19日	4	38	北北東
4	村上 豊	JYM299OH10.15	♂	10月15日	大原勝林院町	土居敬典	高知県室戸市室戸岬町	11月15日	31	257	南西

② 被再捕獲

アサギマダラを標識して放したのち、移動して他所で再捕獲されることがある（被再捕獲）。メーリングリスから分かった結果を示したのが表 5 である。

移動先が兵庫県、鹿児島県、滋賀県、高知県の 4 件であった。滋賀県への移動は、飛来再捕獲の 4 件と同様、逆方向への移動となった。2025 年は北東方向への強い風が吹く時期が多かったのかもしれない。兵庫県への 1 件は摩耶山町への移動で、飛来再捕獲の 1 件とまったく同じ場所である。互いに行き来するような結果は目を引くが、このような近距離間では往々にして起こりえることである。高知県と鹿児島県への移動はどちらも距離の長い移動である。とりわけ、鹿児島県喜界町への移動（図 3）は今年の最長移動距離である。海上を移動せねばならず、まさに‘海を渡るチョウ’を体現してくれた。因みに大原から喜界島まで行った例は 2018 年に 2 件ある。



図 3 喜界島で再捕獲された大原標識の個体（福島誠氏撮影）

③ 再捕獲率

標識したアサギマダラはどの程度再捕獲されるのであろうか。まず、飛来再捕獲から見てみよう。再捕獲した個体に標識した人が、全部で何頭に標識したかはわからないが、こちらで捕獲した全個体はわかっている。全再捕獲個体数/全標識数×100 を飛来再捕獲率（％）とすると、飛来再捕獲率は 2.6％（4/153×100）であった。100 頭を捕獲すれば 2.6 頭が再捕獲できる確率である。

同様に 153 頭に標識して 4 頭が再捕獲されたが、これを被再捕獲率とすると、被再捕獲率はやはり 2.6％であった。100 頭に標識すれば 2.6 頭がどこかで再捕獲される確率である。この確率は過去 10 年間の平均（表 2 参照）と比べて、移動再捕獲率については少し高率であり、被再捕獲率については平均並みと言える。しかし、標識数はさほど大きな値ではないので、どちらの値もおおむね平年並みと考えた方がよいのかもしれない。

4. おわりに

温暖化による季節の 2 極化、シカによる野外での吸蜜植物の減少はアサギマダラの移動に与える影響は少なくなく、大原を含む近畿地方でのアサギマダラの飛来は遅滞化、短期間化、減少化の傾向にある。アサギマダラそのものは長距離移動することによって、その影響を軽減することができ、直接個体数の減少につながっているとは考えていないが、アサギマダラの標識調査を継続的に行うことは、私たちの住む環境の変化を数量的に知る一つの重要な方法であると考えている。そのためにはアサギマダラの飛来基盤となっているフジバカマを健全な状態に保たねばならない。土壌や水分条件、病害虫の発生に敏感な植物なので、日々の管理に気を配りつつ、来年のアサギマダラの飛来を待ちたい。

（文責：藤野適宏）

<11 月おもな活動の報告>

◆ 11 月 5 日（水）10：00～ （報告者：奥谷）

○参加者 小松、藤野、木村、塩尻、大友、奥谷、計 6 名

○活動内容

- ・ 会議 ①本日の活動内容
②セブンイレブン助成金申請
申請書提出完了ー受け取りの連絡あり
要求物品で抜けていた物品ー網室外のエノキ用ネット、傷害保険
- ③学校の野外越冬幼虫調査 11月28日(金)午前 実施
学校・地域・行政との越冬幼虫調査打合せ 11月19日(水)午後
久保様より問い合わせありー荷物の運搬、除草等を依頼した
- ④文化センター他へのお礼について
- ⑤今年の網室内のオオムラサキの羽化数とその性比について
羽化が例年より減、雄の個体が多い
考えられる原因；薬剤散布の影響、遺伝子的劣化、網室内エノキの葉の劣化
- ・ 作業 ①幼虫管理 ②フジバカマ園内のエノキの実生のポット上げ
③フジバカマの伐採 ④第2網室外のクルミの木の剪定

◆11月12日(水)10:00～ (報告者：小松)

○参加者 塩尻、的場、大友、木村、小松 計5名

○活動内容

- ・ 会議 ①本日の活動内容
- ・ 作業 ①網室内の幼虫の観察ー変色している幼虫はほんのわずか
②ルートセンサスー種類数、個体数とも減少。今回で終了。

◆11月19日(水)10:00～ (報告者：小松)

○参加者 藤野、的場、木村、村上、小松 計5名

○活動内容

- ・ 会議 ①本日の活動内容 ②大原学院の越冬幼虫調査について
③文化センターほかへの礼について ④理科室の捕虫網について
- ・ 作業 ①網室内の幼虫の観察ー網室内での幼虫の降下を確認
②アサギマダラ幼虫の観察 ③網室内のエノキの根元に落ち葉を撒く
④網室周辺のエノキの剪定

＝ 目 次 ＝

安曇川水系流域のシコブチさん その2.....	1
麦酒	5
大原のアサギマダラ標識調査報告(2025年度南下移動期)	6
11月おもな活動の報告.....	9
目次	10

発行 大原のオオムラサキを守る会・蓬莱むしの会 2025年12月10日 第21号

大原のオオムラサキを守る会 〒606-0044 京都市左京区上高野仲町54 小松清弘

蓬莱むしの会 〒520-0105 大津市下坂本1-40-16 大友正生

編集 〒611-0011 宇治市五ヶ庄西川原21-151 藤野適宏